

氏 名 : 寺門孝之
学位の種類 : 博士 (芸術工学)
学位記番号 : 論博第 151001 号
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 19 日
学位授与種類 : 学位規定第 4 条 第 2 項該当 (論文博士)
学位論文題目 : 14~16 世紀イタリアの受胎告知画における天使表出の意義
「あいだ」を活性する天使~空「間」・時「間」・人「間」
専門委員 : 戸田ツトム教授、齊木崇人教授、黄國賓教授、
岡田温司 (京都大学大学院 人間・環境学研究科教授)、
藤原えりみ (フリーランス)

審査結果の要旨

本論文は、14~16 世紀のイタリアの画家達による受胎告知画において、視覚的に表出された天使像が諸処の形象群と共に構成する絵画空間や視者との「あいだ」の有り様を解明し、その変容過程を分析することにより、そこに天使表出の意義を明らかとすることを目的としている。

著者は、天使像を描く実作者として、絵画表現における天使像とは何なのか、人間はなぜ天使像を存在させるのかを考察し、時代を超えた天使像を提示することを究極の目的として本研究を展開している。

研究の素材および方法は、実地観察の中心を 14~16 世紀のイタリアの画家による受胎告知画に材料を限定し観察し得た 46 点に加えて、既存の文献で紹介された 102 点の受胎告知画を抽出し重複を避け、計 144 点の編年を考察して「受胎告知集 2015」をまとめ本研究の基礎材料としている。天使表出がその絵画空間における他の表出形象要素とともに構成する構成原理を比較考察し、その変化を辿り、そこに天使を表出する意義を考究している。

本論文は序論、1~3 章、結論から成る。

序論では、研究の目的・視点・方法と既往研究、における本研究の位置づけを明らかにしている。

1 章では、天使とマリアがどのような配置で表出されるかに着目して論じている。天使表出の意義は、天使とマリアが向かい合い、対称をなすことにより強調される水平と垂直の軸線に対して、天使がマリアに示す所作によって構成される「斜線」が、絵画内に運動性・回転性を生起させ、視者の眼差しを絵画内に誘導し、空間のみならず時間的な「前進」をも促すことであり、絵を見る者に奥行き方向の「彼方」へと誘うと考究している。

2 章では、天使の飛翔表現に着目し、天使と大地との「あいだ」の天使の足下周辺の形象やその下の基盤面の表現を考察している。15 世紀の天使の足許の「雲」とその下の基盤面の「不定形模様」は動作を伴わない飛翔を潜勢し、マリアの足許の「格子文様」が共存し均質ではない不連続を強調する絵画空間を構成していると考察している。16 世紀には「不定形模様」の基盤面の表出が失われ、絵画空間が線遠近法的な体系的空間として完成するに従い、天使は飛翔の動作を伴って表現される。結果としてその天使と大地との「あいだ」の足許には立体的な「雲」の描写が現れる。天使のみならずプトー(有翼児童)も群れて飛翔する 3 次元空間として絵画空間は時間的前進性を排除し瞬間を視覚表出するようになると考察している。

3 章では、「視線」の表現が生起する「あいだ」を考究している。受胎告知において天使は真横顔として視線をまっすぐにマリアへ差し込む様に表出されている。一方マリアが真横顔を天使に向ける表出は同一画面で 2 者の視線が交わることは少ない。真横をなす

天使へのマリアの視線は絵を見る者の視線と直交して十字をなし、視者が絵画に向う視線は、天使の視線によってマリアへの注目へと転換されることを考察している。その結果、受胎告知画に表出される内容はマリアの内面として再表出され、視者は絵画と対面する時、マリアと向かい合うこととなり、それを導く天使が絵画と視者との「あいだ」に存在する構造を明らかにしている。

結論では、以上の研究のまとめを行い、天使表出の意義について以下の3点を明らかにしている。

1. 天使のマリアへの視線と見る者の視線が十字に直交することで、視者が絵画と対面することがマリアへの注目に転換される。
2. 絵画空間内に表出される視覚的な奥行きと同時に、マリアの内面の奥行きが表象されていく。
3. 受胎告知画において表出される内容は、マリアの内面として収斂する。そして視者が絵画と対面することにより、マリアの内面と向かい合う。その「あいだ」に存在するのが天使である。

～空「間」・時「間」・人「間」～「あいだ」の活性とその成果について著者は、14～16世紀のイタリア受胎告知画において天使の表出は、人を楽園と切り離し、空間的に切り離し、時間的に切り離して瞬間を固定し、人と人を切り離し個人とする。あらゆる「あいだ」を切り離れた上で、個人となった者が救世主の到来に立ち会うように導く。それらのすべてが、人に似ながら背に翼を有して地上に属さず、真横を向きつづける天使の表出により喚起される。空間・時間・人間と天使表出が形成する「あいだ」こそが、絵を描く者、絵を視る者の想像力を促し、創造性をはばたかせる。絵画における天使像表出の意義とは、空間・時間・人間それぞれが描く「あいだ」を喚起し、意識化し、活性することにある、としている。

このような立論と考察は、天使像を描き続けてきた実制作者であり画家である著者が、受胎告知画に着眼し、描かれた受胎告知絵画の基本形と基本原理を明らかにしたもので、天使とマリア、天使と人の「あいだ」の構成の定義に新たな解釈をおこない、受胎告知画の空間の構成と体系を明らかにしている。今後の展開として著者は、イタリアのみならずヨーロッパ諸地域における相違、17世紀以降20世紀に至る天使像、そして日本における様々な天使表出の研究にも意欲的に取り組む予定である

本論文は、14～16世紀のイタリアの画家達による受胎告知画の中に描かれた天使像の表出の意義を基本形と形成原理から明らかにしているものであり、芸術工学、ビジュアルデザインにおいて、表現された図像や空間、さらには環境や社会の理解と現れ方を捉える際の関係の概念構造を示したのみならず、美術史、美学、歴史学、空間学等の関連分野に対しても新たな視点を提示するものである。

平成28年1月13日、芸術工学研究科に於いて、審査委員が全員出席のもとに最終試験をおこない、論文の内容について説明を求め、関連事項について質疑応答をおこなった。その結果、委員全員の合議の結果、合格と判断された。よって、著者寺門孝之は博士（芸術工学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。